

## ストラヴィンスキー/組曲「火の鳥」(1919年版)

弱冠28歳で、ロシア・バレエ団のディアギレフから、その命運を握るオリジナル作品を託された新進作曲家のストラヴィンスキーは、祖国ロシアの民話と伝統的なオーケストレーションを結びつけた初めての大作「火の鳥」で、みごと成功を収めた。パリの口うるさい観客も、ロシア色が濃厚なゴロヴィンの装置と火の鳥を演じたカルサーヴィナの華麗な踊りを楽しんだ。火の鳥のきらびやかな雰囲気を表す木管とハープとヴァイオリンの細かいモチーフや、魔王の登場を示す低弦と金管のうなる音に魅せられたことだろう。

今回、演奏される1919年版はより多くのオーケストラで演奏できるよう、原曲の巨大な4管編成を2管に縮小し、7つのシーンを抜き出して半分ほどの長さにまとめた組曲。第一次世界大戦を経て、シンプルな楽器編成と形式による新古典主義へと作風を転じた時期で、初演版の民族色と華麗さはやや薄らいでいるものの、今日では1919年版が最も多く演奏される。

〈序奏〉はカスチエイの魔法にかかった夜の国のイメージ。〈火の鳥の踊り〉と〈火の鳥の変奏曲〉は火の鳥が可憐できらめく踊りをみせ、現れたイワン王子がこれを追いかける。

〈王女たちの踊り(ホロヴォート)〉はカスチエイに囚われた王女たちの優雅な踊りのシーン。ロシア民謡から引用された楽想が2つ組み合わせられている。これを見て、王子はツアレヴナ姫に心惹かれる。〈カスチエイ王の魔の踊り〉は助けに来た火の鳥によって、魔王とその手下たちが踊り狂うシーン。続く火の鳥の〈子守唄〉で踊り疲れた一党は眠ってしまう。〈終曲〉は穏やかなホルンの独奏からはじまり、王子と姫が結ばれる。ロシアの華麗な結婚式を想起させる。

白石美雪

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持ち替え1）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バスドラム、シンバル、タンバリン、トライアングル、シロフォン、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦5部（スコア上の表記）

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます